史記漢書の一考察

——漢代年號制定の時期に就いて——

藤田至善

一

普通に年號は漢武帝の建元元年に初めて制定された如くに考へられてゐる。然しこれは後世の追稱である。年號制定の事情に就いて記載のあるのは、史記封禪書と漢書郊祀志上とである。史記封禪書には、

（A）其後三年、有司言、元宜以天瑞命、不宜以一二數、一元曰建、二元以長星曰光、三元以郊得一角獸曰狩云。

とあり、漢書郊祀志上には、

（B）後三年、有司言、元宜以天瑞、不宜以一二數、一元曰建、二元以長星曰光、今郊得一角獸曰狩云。

とあつて、この時有司の上言によつて建元、元光、（元朔）、元狩の年號が初めて制定されたのである。① 然らばこの有司の上言は何時のことか、これを決定することによつて問題は解決する譯である。私は暫らく封禪書（A）の文のみを取つて、この時期を考證して見よう。

封禪書には前に引用した（A）の文に直ぐ引續いて、

其明年、冬、天子郊雍、始立后土祠汾陰脽上、禮畢、天子遂至滎陽而還過雒陽、下詔曰、三代邈絶遠矣、難存、其以三十里地封周後、爲周子南君、以奉其先王祀焉。

とあり、これは漢書郊祀志上も同様である。この事を漢書武帝紀と對照すると、

元鼎四年冬十月、行幸雍、十一月甲子、立后土祠于汾陰脽上、禮畢、行幸滎陽、還至洛陽、詔曰觀于周室、邈而無祀、其封嘉爲周子南君、以奉周祀。

とあつて、全く同一の事件が記載されてゐる。又漢書郊祀志下にも、

元鼎四年十一月丙子、始立后土祠於汾陰。

とあり、又史記建元以來侯者年表、漢書外戚恩澤侯表に「元鼎四年、周子南君」の封ぜられたことが記されてゐる。以上によつて推算すると、(A)の「其後三年有司言」は、元鼎四年の前年、即ち元鼎三年のことであるのは一點疑問の餘地がないと思ふ。即ち史記封禪書(A)によると、元鼎三年初めて年號が制定せられたことが解るのである。

然るに飜つて一方、漢書郊祀志上(B)の文を見ると、殆んど全く(A)と同一であるが、(A)に「三元」とあるのを(B)はこれを「今」と改めてゐるのである。故に更らに今度は專ら(B)にある「今」の文字に重點を置いて考證することにする。漢書武帝紀に、

元狩元年冬十月、行幸雍、祠五畤、獲白麟、作白麟之歌。

とあり、又漢書禮樂志にも同一のことが記されてゐる。武帝の元狩元年白麟を得たことは實に稀有の瑞祥であつて、武帝の太平の世を象徴するものとして非常なる衝動を天下の人心に與へた有名なる事件であつた。彼此合せ考へると、(B)の「今」は明かに元狩元年を指すものとしなければならぬ。即ち漢書郊祀志上(B)によると、元狩元年初めて年號が制定せられたことになるのである。

前述の如く、年號制定の時期に關して、史記と漢書との間に兩說が對立する譯であつて、後の學者各々その一を持してゐるのである。

元鼎三年說を取るものは、劉攽、王朗、齊召南(漢書補注卷六)、周壽昌(漢書注校補卷四十二)、吳仁傑(兩漢刊誤補遺卷二)、〔石韞玉(漢書刊訛)〕等である。

元狩元年說を取るものは、荀悅(漢紀卷十一)、司馬光(通鑑卷十九)、朱子(通鑑綱目卷之四)、冊府元龜(卷之十五)、王榮商(漢書補注卷三)等である。

王先謙の如きはこの兩說何れが正しいか明言してをらない(漢書補注卷二十五上、卷六十四下)。

この兩說の分れる所全く(A)の「三元」とあるのを(B)に於て「今」と改めた點にあるのである。然らば何故に「三元」を「今」と改めたのであらうか。

又この兩說果して何れが正しいのであるか。

二

、漢書(卷六十四下)終軍傳に、武帝が雍に行幸した時白麟と奇木とを得たので、博く羣臣に謀りその議を問ふた處、終軍はこれを以て嘉瑞として一の對策を上つたことが記され、この上對の全文が收錄されてゐる。その一節に、

今郊祀未見於神祇、而獲獸以饋、此天之所以示饗而上通之符合也、宜因昭時令日改定告元。(師古曰、昭明也、令善也、)

とある。この對策は史記には收錄されてをらぬが、王充論衡には、指瑞篇、講瑞篇、異虛篇に各々その一部分が散見してゐる。その文章の典雅にして、義理の整齊なる點優に漢代文苑の英華であつて、有名なる對策の一つである。

思ふに班固は司馬遷の後に於て、この對策を一つの新らしき史料として手にすることが出來たので、この文中にある

「宜因昭時令日改定告元」の語に非常なる重點を置き、武帝は終軍のこの對策に從つて白麟奇木を得た瑞祥を記念するため、この年を以て元狩元年と云ふ年號を制定したものゝ如くに考へたのである。故に班固は漢書終軍傳にこの對策を全部收錄して、その最後に、

對奏、上甚異之、由是改元爲元狩。

との結論を下し、この對策を史料とすることに依つて得た自己の解釋を明記してゐるのである。班固が漢書郊祀志上(B)に於て敢て史記封禪書(A)の「三元」を「今」と改めたのは、全くこれと相關呼應するのであつて、班固は終軍のこの對策を斯く解釋することによつて、この對策と(A)(B)の有司の上言とを全く同時に行はれたものと考へてゐるのである。②

班固は郊祀志上に於て殆んど全く史記封禪書の文を襲用した。然し班固は決して史記を無意味に踏襲したのではなく充分取捨選擇に意を用ひ、極めて嚴正なる歷史家の態度を持して、兎にも角にも史記に對して一應の批判を加へてゐるので、この點に於て班固は確かに史家の見識を發揮してゐるのである。班固が「三元」を「今」と改めたことに對し私は大なる興味と尊敬とを感ずるのである。

(一) 然し班固が眞實であると信じ、敢へて史記の誤りを正す典據としたこの終軍の對策は、よくよく研究考證して見ると、不幸にもこの對策そのものが頗る疑しい史料である。それはこの對策の初めの部分に、

票騎抗旌、昆邪右衽。

とある句が問題となるので、齊召南は、

按、此對在元狩元年冬十一月、行幸雍祠五畤獲白麟時也、昆邪來降、其事在(元狩)二年秋、終軍此時何以

能預言邪、(霍)去病至元狩三年、始爲票騎將軍、在(元狩)元年、何以豫言票騎、疑票騎抗旌二語、後人所改竄、而班氏誤承用之。(漢書補注卷六十四下)

とあり、劉奉世(漢書補注卷六十四下)、周壽昌(漢書注校補卷四十二)も同様の考へである。これは全く正しい觀察であると思ふ。漢書武帝紀を見ると、

元狩二年、昆邪王殺休屠王來降、

とあり、又漢書百官公卿表上には、

元狩三年、昆邪王降、

とあり、兎も角、昆邪王の來降は元狩元年以後のことである。又史記(百十一卷)霍去病傳には、

元狩二年、以霍去病爲驃騎、

とあり、漢書武帝紀、史記漢興以來將相名臣年表も同一であつて、霍去病以前には誰人も未だ驃騎將軍になつたものがない。③以上によつて、驃騎將軍の官名は元狩元年にはなかつた筈である。故に終軍のこの對策は元狩元年以後のものであつて、この場合には不適當な史料である。

(二) 又然し、この對策の「票驃抗旌、昆邪右衽。」の語のみを後世の竄入として、殘りは確かに元狩元年の上對であると言ふ考へ方も亦成立する。④この場合にも亦不幸にして、班固がこの對策に下した解釋が誤つてゐる。この對策中で班固が最も重點を置いた部分は「宜因昭時令日改定告元」の語である。班固はこれを根據として敢て「三元」を「今」と改めたのである。然らばこの語に下した班固の解釋は果して正しいか如何。

こゝに注意して考へねばならぬことは、本來紀年と年號とは別なものである。兎角この二つは混同され易い。古代に

あつては、紀年のみあつて年號はない。曶鼎に「隹王元年六月」とあり、尙書伊訓に「惟元祀、十有二月」とある如くである。

抑々この「元」とは何か、爾雅釋詁に「元始也」とあり、春秋繁露（玉英篇）に「謂一元者、大始也」とある如く、最始と云ふのが本來の意味である。公羊傳には「元年者何、君之始年也」とある。この解釋は誠に當を得てゐるので、君主はその卽位の最始の年を以て元年とするのである。故に本來君主の治世一代一元が原則で、改元の行はれることは殆んどなかつた樣である。⑤然るに武帝の時に至つては前後十度改元が行はれてゐるが、未だ年號の制定のなかつた時にも矢張り改元だけは行はれてゐるのである。卽ち前引の（A）に「元宜以天瑞命、不宜以一二數、一元曰建（元）、二元以長星曰（元）光、三元以郊得一角獸曰（元）狩云」とあるが、これによつても此の時迄は一元、二元、三元と云ふ風に改元だけは行はれてゐたが、年號は未だ制定されてゐなかつたことが解るのである。年號がなかつたからこそ僅かに一元、二元、三元の稱呼を以つて改元の前後を區別してゐたのである。而してこの時有司の上言によつて初めて年號が制定され、一元、二元、三元が建元、元光、（元朔）、元狩と云ふ年號に代へられたのであるから、これらは何れもその元年より年號があつたのではない。⑥後世年號を改めることゝ元を改めることゝは同一であるが、年號のなかつた時代にはこの二つは同時に行はれ得るものではないのである。

斯る事實を念頭に置いて、更らに新らしい眼を以つて終軍の對策中の「改定告元」の語を見ると、これは全く改元と同じ意味に解釋すべきものと思ふ。卽ち終軍は白麟奇木を得たことを記念するために「改元」を上奏したので、年號云々のことには全く一言も觸れてをらぬのである。この點に於て、この對策を假りに元狩元年の上對としても、班固がこれを史料としながら、班固の時代には既に年號と改元とが同時に行はれてゐたため、不用意にこの二つを混同すること

によつて下した解釋は誤つてゐるのである。從つて班固が史記の「三元」を「今」と改めたことも亦誤りである。故に年號制定の時期に就いては史記封禪書に據つて元鼎三年とする說が正しいので、班固の考へは全く曲解である。

然しながら、以上の考察によつて知り得た重大なる事實は、單に年號制定の時期に關してゞはなくして、寧ろ史記漢書そのものについて、卽ち班固が漢書を書く時、史記を如何に利用し、如何に批判したかと云ふ歷史家としての班固の態度である。漢書郊祀志上は殆ど全く史記封禪書を襲用したものではあるが、然し班固は常に史記に對して一家の見識による嚴正なる批判の眼を以つてこれに臨んでゐる。不幸にして、この場合に於ては班固は史記を改めることによつて却つて自ら誤りを犯したのであるが、然し我々は班固が正しき史料であり且又正しき解釋であると確信して、敢て史記の誤りを正さんとしたこの努力は充分に味はるゝのである。私はこの事實を眞に崇高なる歷史家の信念であると思ふ。班固は不幸にして、歷史事實の考證に於ては誤りを犯したけれども、歷史家としての眞摯なる態度はこのことによつて益々明らかにされた。漢書は多く史記を襲用してゐるのであつて、これは封禪書と郊祀志との間だけではなくして、本紀に於ても、或は又他の諸志・列傳に於ても全く同樣である。然しその何れもが單なる無意味なる模倣襲用では決してない。漢書は史記を踏襲しつゝも、その間に班固の見識が充分發揮されてゐる。班固に特有なる歷史の世界が開かれてゐるのである。⑦これあるがため漢書百二十卷を著した班固の情熱が漢書に溢れ、私にはこれが實に身に泌みて感ぜられるのである。いでや次節に於て進んで史記と漢書とについて一言論評を加へようと思ふ。

三

史記と漢書とは各々その優れた性質によつて、後世より極めて高き評價と鋭き批判とを加へられ、今日に至る迄この

兩書に對する得失の議論が盡きぬ有樣である。然しながらこれ等の論議の內で、最も興味あり且つ中心ともなるべき點は、史記を以つて古今の變を究める會通の書であり、漢書を以つて漢一代を包擧する斷代の史であるとすることに於て、互に相一致してゐるのである。劉知幾が史通(六家篇・人物篇)に於て漢書を稱讃するのは、その論據とする處專らこの點にあり、鄭樵が史記を推稱しこれに倣つて通志を作り、その總序に於て漢書を排擊してゐるのも亦この點に於てゞある。章學誠の如きは最もよく史記漢書の特色を捕へ、かの有名なる「班書體圓用神、班氏體方用智」の語を發し、卓拔無雙の評論を下してゐるが、未だ會通か、斷代かの見を離れてをらぬやうであつて、その絕世の名著である文史通義に於て、

遷書一變而爲班氏之斷代、遷書通變化、而班氏守繩墨、以示包括也。(書教篇下)

と言つてゐる。近代では梁啓超(中國歷史研究法第二章)・劉咸炘(太史公書知意・序論、漢書知意・序論)の如きも同樣であり、我が岡崎博士も章學誠流の考へ方を奉じてをらるゝやうである。[8] 然しながらこの見解は果して正しいであらうか如何。

今漢書を繙いて見ると、その中心ともなるべき本紀は筆を高祖に起し、哀平に絕つてゐる。この點のみを捕へて論ずれば、漢書を以つて斷代の史と稱しても誤ではない。然しながら目を轉じて漢書の十志を精讀すれば、そこに班氏の持つ歷史世界が如何にも鮮かに、且つ極めて力强く表現されてゐることを痛感するのである。勿論漢書の十志なるものは史記の八書を踏襲した部分が多い。[9] この點を以つて人或は漢書に對して皮相なる見解を下すかも知れない。現に鄭樵の如きはこれを「剽竊」と言つて罵つてゐる。然しながら、私は漢書が史記を踏襲したと云ふこの事實に限りない興味を感ずるのであつて、このことは何を意味するかと言ふに、漢書にも矢張り史記と同樣に會通の精神が動いてゐるからこ

そ敢て史記を襲用したと考へるのである。若し漢書が唯單に漢一代の歴史を叙述するのに止まるのであるなれば、史記の八書を踏襲する場合に於てその範圍を漢一代に止めればよい。八書にある如く古代に迄溯る必要は毫もない。然かも前に考究した如く、漢書郊祀志上は史記封禪書を踏襲しながら、決してこれを無批判に襲用したのではなくして、充分に一家の見識と信念とを持つて、その改むべき部分は斷然これを改めてゐる。その改めた點が果して正當であるか、否かは今暫らく問はない。唯こゝでは、班固が史記を踏襲する場合に於けるこの態度・この精神が漢書全篇を通じて流れてゐることを注意し、漢書にも矢張り史記と同樣會通の精神が動いてゐることをより一層强調すればよい。漢書十志は史記八書の無意味なる剽竊では決してない。反對に史記八書と漢書十志とを詳細精密に比較對照するならば、兩書の間に若干文字に異同あり、この異同に着目することに依つて、司馬氏と班氏との間にある歴史觀・人生觀の相違が明かにされると考へるのである。換言すれば漢書十志は史記八書を踏襲しつゝも、その間に於て別に班氏獨特の新たなる境地を拓いてゐるのであつて、この點に於て、漢書の持つ史觀が深く我等の胸打つものあるを覺へるのである。

特に漢書食貨志上の如きは明かに班氏の創意であつて、史記平準書が筆を漢代に起し重に武帝の經濟政策を叙述してゐるのに對して、漢書はその食貨志下に於ては平準書を踏襲してゐるけれども、その食貨志上に於ては別に新生面を開いてゐるのであつて、班氏の腦裡に映じた古代の經濟狀態が如何にも力强く情熱に燃へて描き出されてゐる。今その一節を紹介すると、

神農之世、食足貨通、然後國實民富而敎化成、黃帝以下通其變、使民不倦、堯命四子、以敬授民時、舜命后稷以黎民祖饑、是爲政首、禹平洪水、定九州、制土田、各因所生遠近賦入貢棐、杼遷有無萬國作乂、殷周之盛、詩書所述、要在安民富而敎之。故曰、不患寡而患不均、不患貧而患不安、蓋均亡貧、和亡寡、安亡傾、是以聖王域民、築城郭以居之、制廬井以均之、開市肆以通之、設庠序以敎之、士農工商四民有

業、學以居位曰士、闢土殖穀曰農、作巧成器曰工、通財鬻貨曰商、聖王量能授事、四民陳力受職、故朝亡廢官、邑亡敖民、地亡曠土、理民之道、地著爲本、故必建步立晦、正其經界、民是以和睦、而敎化齊同、力役生產可得而平也。

班固によつて考へられた古代の社會生活が如何に醇美であつたか、一讀して解ると思ふ。班氏にあつては、漢代は單に忽然として出現し・存在したのではない。堯舜以來の長き歷史の傳統を持つた漢代が、古代世界を內に包攝しつゝ存在してゐるのである。

漢書には如何にも強く歷史に於ける會通の精神が動いてゐる。このために漢書によつて、漢代が古代との關連に於て鮮かに理解・把握されるのである。堯舜の理想世界への憧憬と反省とに對して、漢書は史記よりもより以上の溢れる情熱を持つてゐる。

史記漢書共にその書志に於て叙述せる問題は多く國家の政治財政問題と離れるものではない。岡崎博士の語を借りるならば、「史記の八書は現代の重大問題を中心として遡つて、之が系統を古に尋ぬると云ふ方法の取られたに反し、漢書の諸志は、學者の古制に對する觀念を以つて、直ちに歷史を制裁した」⑩のであつて、これ正に當時の經世家の重大なる關心事であり、これが強くこの二人の歷史家の頭を動かしたのであつて、何れも現代との關連に於て過去の世界が考へられ、過去の歷史は現在に關聯することによつて生命ある事實として、この二人の歷史家の腦裡に生き生きとして蘇つて來るのである。こゝに於て現代へ、又同時に過去への深い省察がなされてゐるのである。

史記はその本紀のみを取つて論ずるなれば、成る程、上は黃帝堯舜に始り下は漢武帝に終る體裁をなしてゐる。然し史記が秦本紀と秦始皇本紀とを並べたこと及び項羽を本紀に列したことに對し體制上より後世の非難が多い。この史記

の本紀の何處に眞の會通の義が存するのであらうか、これ大いに疑問である。又後の史記を非難するもの、例へば漢書の作者が史記に下した評論を見ると、

至於採經據傳、分散百家之事、甚多疏略、或有抵梧。（漢書司馬遷傳贊 後漢書班彪傳）

と言つて、史記が徒らに多聞廣載を誇り、何等一貫の精神のないことを指摘してゐる。又劉知幾（史通六家篇・人物篇）もこれと同じ意味の批評を下してゐるのであつて、私はこれ等の批評を正當とは思はぬけれども、兎も角史記に流れる會通の精神が何であるかを把握するに困難であることを注意すればよい。

岡崎博士は「潛運默移」の語を以て史記の會通の義を捕へんとしてをられるのである。これが史記の會通の義であるか、或は然らんや。⑪

歷史を理解するには二つの立場があると考へられたことがある。その一は歷史を連續發展の流れとして考へるのであり、他の一は歷史の流れに斷面を劃し、この斷面に於て一の類型・樣式を見出さんとする考へ方である。即ち一は會通の義であり、一は斷代の法である。史記と漢書とは、この相對立せる二つの立場を最もよく代表してゐるものゝ如くに今日迄多くの學者によつて考へられてゐた。然しながら、歷史が發展であり流動である限り、會通と云ひ斷代と言ひ、これは二つの相對立せる立場ではあり得ない。歷史には類型・樣式を求めることゝ共に發展の姿を見ることが又同時に要求されるのである。即ち斷代の中に會通の義を含み、會通の中に斷代の意を寓することが歷史の持つ眞の姿である。漢書百二十卷は上述する所によつて既に明かなる如く、この二つの立場が完全なる調和・渾然たる融合の形をなしてゐるものと言はなければならぬ。

この小稿の題目は我が學生時代、羽田先生より演習の課題として與へられたものであり、又この小稿を草するに當つて岡

崎文夫・西田直二郎・原隨園博士の高說を參考にした點が多い。こゝに附記して四先生に對して敬虔なる感謝の念を捧ぐる次第である。

（一一、五、一三）

註

①史記封禪書に「三元」とあるのは元狩を指してゐる。然るに武帝の時の年號は建元（一元）、元光（二元）、元朔（三元）、元狩（四元）の順であつて、元狩は「三元」ではなく「四元」である。これに對して周壽昌は「元狩爲三元、恐誤脫也。」（漢書注校補卷三）と言ひ、錢大昕は「言建元元光而不言元朔者、（建元元光）皆取天象、若元朔紀年、不主天瑞、故不及之耳。」（二十二史攷異三）と說明を加へてゐる。「三元」とあるのは明かに「四元」の誤りであるが、漢書郊祀志上はこれを「今」と改めたのである。「今」と改めたことが果して正しいか、否かゞ問題となるのである。

②資治通鑑（卷十九）には、漢書郊祀志上に記載されてゐる元狩元年獲麟の時の有司の上言と、「後三年有司」の上言と、この終軍の對策とを同時に行はれたものとして、この三つの上奏文中の各々一節づゝを集めて一つの上奏文を作り上げ、これを元狩元年の條に記載してゐる。

③史記正義によると驃騎將軍の號は武帝の恩寵によつて特に霍去病のために初めて設けられたことになつてゐる（史記・衞將軍驃騎列傳）。故に驃騎と言へば霍去病を指すのは普通のことであつて、史記（百十一卷）は霍去病傳を驃騎傳としてゐるのはこれがためである。

霍去病が驃騎將軍となつたのは史記霍去病傳及び漢書武帝紀には元狩二年のことゝなつて居り、漢書霍去病傳・百官公卿表下では元狩三年のことになつてゐる。兎も角霍去病が驃騎將軍になつたのは元狩元年以前のことではない。然るにこゝに一言注意すべきは、史記（百十一卷）公孫敖附傳に「武帝立十二歲（公孫敖）爲驃騎將軍」とある。これによると公孫敖は元光六年に驃騎將軍となつたので、元狩元年以前に驃騎將軍があつたことになる譯である。然しこれは既に史記考證・漢書考證に於て指摘してゐる如く恐らく「驃」は衍字であつて、漢書（五十五卷）公孫敖附傳にはこれを騎將軍と改めてゐる。これは史記（百十一卷）衞青傳には「元光六年、公孫敖爲騎將軍」とあり、漢書衞青傳には「元光五年、公孫敖爲騎將軍」とあるのが正しいのである。霍去病が驃騎將軍として渾邪王（昆邪王）を討つたことは有名で、終軍の對策に「票騎抗旌、昆邪右衽。」とあるのはこのことを指すのは疑ないの

である。故に「票騎抗旌、昆邪右衽。」の語は元狩元年の對策中に現れ得る筈がないのである。

④終軍の上對の時期を定める一の手掛りとして、終軍傳には此の時白麟と奇木とを同時に得たことが記され、對策の內容もこの二つを以つて共に嘉瑞としてゐる。故にこの奇木を得た時期が他の史料によつて發見されると好都合であるが、これは容易なことではない。漢書自身に於ては勿論のこと漢代の諸文獻にも、又太平御覽・玉海・册府元龜・圖書集成等の類書にも、これに關して記載されてゐない。漢書藝文志には「終軍八篇」あるが今傳らぬ。

⑤「改元」のことに關しては趙翼・陔餘叢考(卷二十五)に詳しい。

⑥建元、元光、元朔、元狩の後に元鼎、元封の年號がある。元鼎は漢書武帝紀・郊祀志上によると、元鼎四年に寶鼎を得たが、この寶鼎は大いに衆鼎と異つてをつたから、これを記念して追稱されたものであつて、その元年より制定されたのではない。元鼎の後、元封に至り初めて年號と改元とが一致するのである。即ち元封は元封元年封禪を行つたことを記念して制定されたのであつて、これ漢書武帝紀・元封元年の條に「詔曰、其以十月爲元封元年」とあり、郊祀志上に「下詔改元爲元封」とある如くで、ここに初めて詔を下し年號と改元とを同時に行つたのである。

⑦今その一例として、史記貨殖傳と漢書貨殖傳とを取つてこゝに比較すると最も興味が深い。史記貨殖傳は史記百三十卷の內で古來最も論議ある一篇であつて、既に我が師小島博士(支那經濟思想の出發點・經濟論叢四ノ三、五)によつて卓拔無比な研究が發表されてゐる。

史記貨殖傳は司馬遷が范蠡(陶朱公)・子貢・白圭・猗頓・蜀卓氏・宛孔氏・宣曲任氏等徒手空拳一代にして能く巨萬の富を獲得した富豪のために特に傳を立てたのである。班固は漢書に於て同じく貨殖傳を立てたのではあるが、この漢書貨殖傳に記載された人物たるや、范蠡(陶朱公)・子貢・白圭以下の傳記は殆んど全く史記の文をそのまゝ襲用してをつて、たゞ僅かに二三名をこれに附加してゐるに過ぎない。この點に於て班固その人には何等一家の見識がないかの如くに見へるのである。然し尙よくこの兩書の貨殖傳を比較對照すると、司馬遷と班固とはその經濟に對する觀念が全く反對であることが容易に理解出來るのである。

司馬遷の經濟に對する考は、既に小島先生も指摘してをられる如く、自由放任主義であり、重商思想である。故に彼はこれ等富豪に對して「素封」の語を用ひて、限りない尊敬の念さへ抱いてゐる。即ち「今有無秩祿之奉・爵邑之入而樂與之比者、命曰素封。

又「千金之家、比一都之君、巨萬者乃與王者同樂、豈所謂素封者邪、非也。」と言つてゐるのである。この富豪に對する態度が司馬遷をして貨殖傳を作らしめた根本思潮であり、司馬遷一流の人生觀でもある。

班固は司馬遷の斯る態度に對して極めて遺憾の意を表し、漢書司馬遷傳の贊に於て「其是非頗繆於聖人、述貨殖則崇執利而羞賤貧」と言ひ、後漢書班彪傳又同樣である。班固の經濟思想に就いては小島博士・岡崎博士(支那史學思想の發達六四頁。漢書食貨志上に就いて、支那學三ノ一)も指摘された如く重農主義である。故に漢書貨殖傳に於て富豪の傳記は全く史記の文を襲用してゐるが、兩者の富豪に對する根本觀念は截然別であつて、同じく貨殖傳でも、史記と漢書とではその著作の態度・精神は全く反對である。

漢書貨殖傳はその序論に於て先王之制を述べ、古代の醇朴なる經濟生活を描寫し、自らの經濟に對する考を記しては「是以欲寡而事節、財足而不爭、貴誼賤利。」と言つてゐる。これが班固の理想世界である。故に班固は周室が衰へた結果、諸侯放侈となり僭差極りなく、ために商人の活躍の機運が開け、こゝに巨萬の富を擁せる豪商が出現するに至り貧富の差が大となり、これより社會の秩序が亂れたと考へしみ〴〵と嘆聲を洩してゐる。序論の最後に「故列其行事、以傳世變云。」と言つて、班固自ら貨殖傳を作つた精神を述べ、世の變化の樣をありのまゝに記述する歷史家としての立場より、敢て斯る富豪に對して傳を立てた次第を告白してゐるのである。故に班固は史記にある「素封」の語を削り去り、漢書貨殖傳の末尾に於て「上爭王者之利、下錮齊民之業、傷化敗俗、大亂之道也。」との冷やかな語を投げつけてその結論に當てゐる。こゝに班固の經濟に對し、富豪に對する態度眞に明白である。これと同樣のことが游俠傳に於ても言ひ得るのであり、更に本紀・列傳・諸志に於て漢書が史記を襲用した部分を詳密精細に比較研究すると、實に興味深く、又極めて重大なる問題が祕められてゐるのである。これは我々に對して今後に殘された研究題目である。宮崎市定學士の一研究を參照せられ度い。(讀史劄記・史林二十一ノ一)。

⑧岡崎博士　支那史學思想の發達(岩波講座)、漢書地理志に就いて(支那學二ノ二)、司馬遷と班固(史林一七ノ三)。

⑨史記八書は禮・樂・律・曆・天官・封禪・河渠・平準の諸書である。漢書十志の中で天文・郊祀・溝洫・食貨の諸志は何れも史記の天官・封禪・河渠・平準の諸書を襲用してゐる。然しながら精細綿密に兩書を比較研究すると、既に註⑦に於て論じた如く司馬遷と班固との間の人生觀、歷史觀の相違が明らかになるのである。漢書の藝文志・地理志・五行志・刑法志は班固の獨創である。

⑩⑪岡崎博士　支那史學思想の發達(六五頁及び四八頁)。